

カピバラのものまね

菊池早千絵
静岡県・三三・主婦

カピバラのものまね、してみた。あなたがいつも、笑ってくれたから。自分の顔が、どんな風になっているのかなんて、考えもせず。巨大な体にもかかわらず、やはりそこはネズミだと思わせるような、小心者の仕種。鼻先をヒクつかせる所は、欠かさず念入りに。あなたが笑ってくれるから、いつしか調子を上げて、部屋中を、カピバラが駆け巡る。ただ、おかしくて、うれしくて。

カピバラのものまね、してみた。何故だろう、一人でしてみた。だけど、クスリツともしない部屋で、慌ててやめた。八時間の時差を越えたとしても、電話では、届くはずもない、カピバラの顔。あなたが、笑ってくれなかったら、こんなにもつまらないなんて、知らなかった。ただ、バカバカしくて、情けなくて。

あなたがイタリアへ発つて、二年が過ぎた。あなたがうれしいと、心が躍った。あなたが悲しいと、胸が痛かった。あなたの手の厚みも、指先のざらついた感触も、思い出すのは容易い事だった。離れていても、大丈夫。二人で一緒に、時間を費やしてきたと

佳作

いう感覚は、確信へとかわっている。

だけど、お願い。この瞬間だけでいいから、目の前に居て。

あなたと一緒に笑いたい。大声で笑いたい。あなたが笑ってくれるなら、何万回だつてしてあげる、カピバラのものまね。そして、お腹がよじれるくらい笑おう。

ただ一緒に、ただこの瞬間に、笑いたい。ただそれだけなのに、笑いたいだけなのに、今泣きそうだよ。

*イタリアに居る夫にあてた恋文です。